

レビ記17章「血による聖別」

1A 主の幕屋でのいけにえ 1-9

1B 野外で屠った家畜 1-7

1C 血を流した罪 1-4

2C 交わりのいけにえ 5-7

2B 全焼のいけにえ 8-9

2A 血にあるいのち 10-16

1B 血による宥め 10-12

2B 土に注ぎだす血 13-14

3B 死んだ動物 15-16

本文

私たちの平日の聖書の学びは、レビ記後半部分に入ります。17章です。レビ記の全体のテーマは、「聖め」であります。主が聖いように、私たちが聖い者にならなければいけないという、神からの呼びかけがあります。前半、1章から16章までは、いけにえを献げることによって、聖なる神に近づく道について見てきました。17章以降、後半は、聖別によって、聖なる主と歩むことについて見て行きます。

聖別という、普段は使わない言葉ですが、「聖め別たれている」ということです。私たちが住んでいる世から別たれています。そして神のものとしてされています。ですから、世と同じように生きないで、聖なる神に属している者として生活する、ということです。主に近づいて、恵みによって聖められている者が、別たれて歩むのです。

そして、世から聖別された歩みとして、主が最初に命じられることは「礼拝」です。これまで、主に對して、いけにえの動物を携えて、それを祭司に屠ってもらい、血を流して、火によるいけにえを献げました。しかし、彼らはこれまで、異なるエジプトの宗教の中にいました。その中でも神々に献げる祭儀がありました。そして、これからカナンの地に入ります。そこでも、神々にいけにえを献げる祭儀があります。そうしたものから取って離れて、主を、主の命じられたとおりに献げることが必要になります。

1A 主の幕屋でのいけにえ 1-9

1B 野外で屠った家畜 1-7

1C 血を流した罪 1-4

¹ 主はモーセにこう告げられた。²「アロンとその子ら、またすべてのイスラエルの子らに告げよ。主が命じられたことは次のとおりである。³ イスラエルの家々の者のだれかが、牛か子羊かやぎを宿

営の中で屠るか、あるいは宿営の外で屠るかして、⁴ 主の幕屋の前で主へのささげ物として献げようと、会見の天幕の入り口に持って来ることがなかったなら、血の責任はその人に帰せられる。彼は血を流した。その人は自分の民の間から断ち切られる。

今、イスラエル人はシナイ山にいます。つい数か月前まで、彼らはエジプトにいました。そこで、エジプト人の慣わしにずっと囲まれて、自分たちもそれに倣って生きていたことでしょう。それは、偶像礼拝であり、淫らな行いも含まれていました。金の子牛の事件を思い出していただければ、容易に想像ができると思います。彼らは、モーセが遣わされたのを見て、自分たちの父祖、アブラハム、イサク、ヤコブの神が契約を思い起こして、自分たちを救ってくださったことは分かっています。そして今、荒野にいます。礼拝についてはすべて、主がモーセに語られたことだけを聞いて、それで祭司たちがその命令に従って、いけにえを献げ始めたばかりです。

そして、これから約束の地に行きますが、そこにはカナン人の慣わしがあります。そちらにも、濃厚な異教の儀式、祭儀があります。私たち日本人には、あまりにも沁みついていることですが、彼らにも大きな挑戦がありました。それは、「郷に入りては、郷に従え」です。これは文化的には良いことですが、信仰でもそれをやってしまうとやばいですね。エジプトでは、エジプト人が拝んでいる神々を敬わないといけなと思います。カナンの地に入ったら、カナン人が拝んでいる神々を敬わないと思います。その地域に神がいると思っているので、その神に従わないと思うのが、多神教の信者の自然な感覚です。しかし、私たちの神は唯一であり、全地の神です。どこにいても、天地を造られた方が、まことの生ける神です。

そして、そうした慣わしには、いけにえの制度があつたりします。動物を屠ることです。ですから、イスラエルに命じられた、いけにえの制度ではなく、似ているということで、今までやっていることと同じようにやってしまうという誘惑がいつも付いてまわります。そのような慣わしには、自分の好む場所でいけにえを献げて、そこで神々を拝み、仕える「高き所」というのがありました。後に、イスラエルの地には、いろいろなところに高き所が出来て、ユダの国の良い王さまでも、なかなか、それを取り除くことができませんでした。

私たち日本人なら知っていますが、多くの人は「私は神を信じています」と答えますが、その神が、イエス・キリストの父なる神、天地創造の神とは違うことをよく知っています。けれども、同じように祈るし、お供え物もあるし、水によって清める儀式もあるし、こうした慣わしをやってもいいではないか？ということになります。けれども、そういった慣わしについていったら、結局、イスラエルの神ではなく、異なる神々を拝むのです。

そこで、荒野の旅をしている時に、動物を屠るという時、たとえそれが、自分たちの食べるためであっても、それを主の幕屋の入口のところに持って来なさいと、主は命じられています。自分のすべての生活において、主を覚えなさいということです。しかも、それは宿営の真ん中にある幕屋に

おけるいけにえであり、イスラエルの共同体の一部として献げるものです。さもないと、自分が今まで慣れ親しんできた、自分勝手な神々への供え物と同じことをやりかねないからです。

私がイエス様を信じた時は、親も周囲もだれもクリスチャンはいなかったもので、すべてが新しい習慣でした。教会に定期的に通うことは、非常に異質なことでした。これまで、信仰と呼ばれるものは、第一に、年に一回や二回で済むものでした。初詣などの神社ですね。それが、毎週通うのですから、大きな飛躍です。第二に、信仰というのは心の奥に秘めておくものでした。人々の前で話すようなものではなく、ましてや自分の信じていることを他の人に伝えるなど、もってのほかです。個々人が心の中に思っていればよいものです。

聖書は、私たちが週ごとに信者たちが集まることを強く奨励しています。週ごとどころか、毎日、教会に集っている兄弟たちもいました。また、信仰は公にして、しかも、自分の周りの人々に福音を伝えることを命じられています。そして、教会として、互いに交わることを命じています。しかし、もし、私が、そうしたことはおかしい、自分の自然な気持ちに逆らわないようにしておこうとする、とします。教会に行くのは、もっともっと頻度が少なくてよい。また、信仰というのは心の中で秘めておくだけでよいのだとします。そうすると、何が起こるでしょうか？自分は神を信じていると言っても、その神は、日本人の人たちの多くが言っている、「神を信じている」という時の神と、変わらなくなってしまうのです。自分は、まことの神と主イエス・キリストを信じていると言っているかもしれませんが、実はその神が、周囲の異教の神と変わらなくなっているのです。

つまり、神を信じ、神をあがめる時は、神がどのような方かを知ってあがめるだけでなく、神の命じておられる方法によってあがめることによって、神を神としてあがめることができるということです。さらに、これは個人のことでなく、宿営の中の幕屋で献げるように、キリストの御名によって集まる者たちの中で、つまり教会の中で保たれる、ということです。「マタ 18:19-20 まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

2C 交わりのいけにえ 5-7

⁵ これは、イスラエルの子らが、野外で屠っていたいけにえを持って来るようにするためであり、主のところへ、会見の天幕の入り口の祭司のところへ持って来て、それらを交わりのいけにえとして主に献げるためである。

イスラエルの子らは、自分たちの食べ物のために、当然ながら、牛や羊、やぎなどを屠ります。けれども、先に説明しましたように、家畜を屠った後に、それをまず神々に供えるというのが異教の慣わしにあります。ですから、そのまま屠って食べるならば、そのまま他の神々を拝むようになってしまうかもしれません。そこで主は、すべてのものを、自分たちが食べるためであっても、主に

対する交わりのいけにえとして、献げなさいと命じておられるのです。交わりのいけにえは、一部は、特に脂肪の部分は主が食べ、残りの肉を民が食べることによって、同じものを食べて一つになる、交わるという意味があります。食べる時に、主の前で食べ、それは自分の肉体を養うだけでなく、霊においても豊かにされるのです。

これは、教会においても原則は同じです。「I コリ 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をやるにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」食べるにしても、飲むにしても、神の栄光を現すためにします。そして、それを神のみことばと祈りによって行います。「I テモ 4:4-5 神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません。神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです。」私たちが食前の祈りを献げる時に、それが主との交わりの時でもあるということを感じるとよいです。

⁶ また、祭司がその血を会見の天幕の入り口にある主の祭壇に振りかけ、その脂肪を主への芳ばしい香りとして焼いて煙にするためであり、

交わりのいけにえの時には、屠ったいけにえの血は、青銅の祭壇の側面に振りかけます。それから、交わりのいけにえは、その脂肪分はその祭壇で、芳ばしい香りとして焼くように命じられています。つまり、言い換えますと、主は、まず血を非常に尊んでおられるということです。この章の強調点は血です。血を流すことについて、それは人が勝手に行ってはいけな、神ご自身のみが取り扱うことができるものだということです。10 節以降で、主は血の尊さについて教えられます。

そしてもう一つ、脂肪も主ご自身のものです。脂肪は豊かさを示しています。すべての豊かさは、主から来るのであり、その信仰の表れとして脂肪分は、祭壇の上で焼くのです。自分自身で食べないのです。もし食べれば、それは高慢の現れです。聖書では、心の鈍さ、高慢の現れが、脂肪のように鈍いと言い表されています。「詩 73:7 彼らの目は脂肪でふくらみ心の思い描くものがあふれ出る。」「119:70 彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし私はあなたのみおしえを喜んでいます。」

⁷ また、彼らが慕って淫行をしていた雄やぎの偶像に、もういけにえを献げなくするためである。これは彼らにとって代々守るべき永遠の掟となる。

先ほどから話しているように、主の前にいけにえとして献げるのは、偶像礼拝に陥らないようにするためです。「雄やぎの偶像」とありますが訳によっては「悪霊」と訳されています。古代エジプトで山羊を祭る儀式がありました。また、イエス様が弟子たちといっしょに行かれた「ピリポ・カイサリア」は、「パン」と呼ばれる山羊のギリシア神を祭る儀式の場所でした。

その背後に「悪霊」がいます。偶像のあるところにいつも悪霊がいる、ということではありません。

けれども、人々がそれを神々とみなして拝むところに、悪霊が宿り、単に木や石ではなく、悪霊そのものに仕えているということです。「I コリ 10:19-21 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。」したがって、私たちは注意して偶像礼拝を避けるべきなのです。

ところで、申命記 12 章においては、約束の地に入ってからはいけにえについての、おきてが書かれています。基本的にここ、レビ記 17 章と同じなのですが、主の選ばれた場所、エルサレムから遠くはなれたところに住むようになります。約束の地が、それだけ広いからです。その時は、牛や羊を「あなたの町囲みの中で食べただけ食べてよい。」とあります(21 節)。ここレビ記における戒めは、荒野の旅において、宿営の生活をしている時に、どこにおいても、自分たちが食べる羊や牛の肉についてであります。

つまり、主は杓子定規にすべての状況に、人々に無理をさせて掟を守らせるようにしていないということです。その人の能力に応じて、主に献げることを願われています。主は、教会において礼拝を献げることを願われています。自分の身体を運んで、共に同じ空間で礼拝を献げることを願われています。しかし、病身であったり、他の様々な理由でそれができない人々もいます。そうした時は、例えばネットで礼拝に集うこともできるでしょう。けれども、それを弁解に使うことがあります。自分が礼拝を献げない理由を、何か極端な例を取り上げて正当化します。例えば、「寝たきりの人も教会に来ないといけないうのか？」と、自分は寝たきりでも何でもないので、極端な例を取り上げて、それを教会に来なくても礼拝ができるとしているのです。その人の心が正しいところがないことが、そういった口実に表れています。

2B 全焼のいけにえ 8-9

⁸ また、彼らに言え。だれでも、イスラエルの家の者、あるいは彼らの間に寄留している者が、全焼のささげ物か、いけにえを献げるとき、⁹ それを主に献げようと会見の天幕の入り口に持って来ないなら、そのような者は自分の民から断ち切られる。

こちらは、交わりのいけにえではなく、全焼のいけにえです。つまり、すべてを祭壇の上で焼いて、煙にするいけにえですから、食べる目的はありません。したがって、もしだれかが、会見の天幕の前に全焼のいけにえを携えて来ないのであれば、それは故意に、他の神々にいけにえを献げるのと同じ行為です。

先に言及しましたが、約束の地に入ると、「高き所」と呼ばれているところがありました。カナン人が高き所でいけにえを献げていました。エルサレムにまだ神殿が建てられる前は、ソロモンも含め

て高き所でいけにえを献げていました。主に対するいけにえでしたが、しかし神殿が建てられた後でもそれを行っているということは、いくら主に対していけにえを献げているとしても、実は自分に都合のよい方法で献げているということで、偶像礼拝の余地を残すのです。事実、彼らは主に対していけにえを献げながら、他の神々にもいけにえを献げました。死海の近く、荒野にはアラデという町がありますが、その遺跡には、エルサレムとそっくりの祭壇の場があります。至聖所さえ見つかっていますが、そこには、ヤハウエを示す柱と、カナン人の神を示す柱の二本が立っているのです。このように、自分の都合に合わせた礼拝は、どんなに主に対するといっても、主ご自身ではなく、他の神々と混ぜ合わせたものになるのです。

そして、主の幕屋の入り口に持ってこない者について、「自分の民から断ち切られる」とあります。これは、イスラエルの共同体から断ち切られるということです。もう、神の民の生活から切り離されるよ、ということです。交わりから断ち切られます。主の聖なる集まりにおいて、相いれないものを持ってくることはできない、ということです。「Ⅱコリ 6:14-16a 不信者と、つり合わないくびきをとともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神がこう言われるとおります。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

2A 血にあるいのち 10-16

次は、血についての教えです。聖書が、全体に渡って、血が流されることについて多くを語っていますね。昔の韓国語の聖書は、聖書の横の厚みの部分を赤色に塗っていたものが多くありました。血が注がれている書物です。主のみこころの中に、血が中心的なものとなっています。それが何を意味しているのかをはっきりと語っているのが、ここレビ記 17 章です。

1B 血による宥め 10-12

¹⁰ イスラエルの家の者、あるいは彼らの間に寄留している者のだれであっても、どんな血でも食べるなら、わたしはその血を食べた者に敵対してわたしの顔を向け、その人をその民の間から断ち切る。

血を食べるとありますが、食すると言えばよいでしょうか？ 生き血を飲むこともあるでしょうし、血のついたままの肉を食べることもあるでしょう。こうした、血そのものを食べるという慣わしは、異教においてはよくあることでした。神々に献げられる生き血を自分自身も飲むことによって、その神々にある力や特徴を自分のものにすることができる、という考えです。ですから、私たちには血を食べることについては、気持ち悪いと思いますが、聞いているイスラエルの人々にとっては、かなり身近な問題、大きな挑戦であったと思います。エジプトにある異教の慣わしに、慣れ親しんでいたからです。

しかし、それを行ったら、主ご自身がかなり強い意志で、その人を民から断ち切ると宣言しています。しかも、「敵対してわたしの顔を向け」とまで言われていますね。人が血を食べることを、いかに忌み嫌われているか、その感情を表しておられます。

¹¹ 実に、肉のいのちは血の中にある。わたしは、祭壇の上であなたがたのたましいのために宥めを行うよう、これをあなたがたに与えた。いのちとして宥めを行うのは血である。¹² それゆえ、わたしはイスラエルの子らに言う。あなたがたはだれも血を食べてはならない。あなたがたの間に寄留している者も血を食べてはならない。

なぜ、ここまで血を食べることを禁じておられるのか？ 第一に、「肉のいのちは血の中にある」ということです。医学的にもこれは本当ですね。血液の中に酸素があるから、その血流によって体全体の細胞を生かしています。ちょうど私たちは水の中の魚のように、血の中で生かされているわけです。ですから、霊的にも、血が命そのものを表しているのであり、それを食べる行為は、まさに命を貪ること、生命を軽視することに他なりません。

神は、いのちを尊ばれている方です。カインがアベルを殺したときから、神は、人のいのちを取ることの恐ろしさを、血を流したという言葉で言い表しておられます。「創 4:10-11 主は言われた。「いったい、あなたは何ということをしたのか。声がある。あなたの弟の血が、その大地からわたしに向かって叫んでいる。今や、あなたはのろわれている。そして、口を開けてあなたの手から弟の血を受けた大地から、あなたは追い出される。」主は、その血をもって、その人のいのちそのものであると見ておられます。主は、いのちを取るのには主ご自身のみができることで、人にはできないことだということを示すために、血を食べてはいけないと言われています。

ですから、律法において、人のいのちを奪う者に対して、そのいのちが取られる、とおっしゃられました。どのような戒めも、その人のいのちに尊厳があるという前提によって、与えられております。英語に、「プロ・ライフ」という言葉がありますが、これは中絶反対の立場、いのちを尊ぶ立場を表すことばです。受精卵から墓場まで、いかなるいのちにも尊厳があり、だれもそれを奪うことができない、という考えは、まさに聖書から来た価値観です。

次に、「いのちとして宥めを行うのは血である。」とあります。血によって罪を清めてくれる力を持っているということです。主が、アダムに対して、善悪の知識の木から実を取って食べてはいけない、食べたらず必ず死ぬ、と言われました。アダムは食べてしまいました。そこから、主はアダムとエバに、皮の衣を着せられました。皮があるということは、動物が屠られているということです。そこから、いけにえが血を流すことで、神が人を受け入れられる話が始まります。アベルは、自分の飼っている羊の初子を献げて、主に受け入れられました。ノアは、洪水の後にいけにえを献げて、それで主がその香りがかがれて、もはや洪水によって人を滅ぼすことはしないと決められました。アブラハムも、イサクも、ヤコブも、血を流すいけにえを献げて、主に受け入れられ、そしてモーセを

通して、律法が与えられたのです。

エゼキエル書に、「18:4 罪を犯したたましいが死ぬ。」とあります。聖なる神は、罪のままの人を受け入れることはできません。死ななければいけません。けれども、憐れみ深い主は、その身代わりのいのちによって、その人を受け入れるようにされました。それを、宥めと呼びます。ご自分の正しい御怒り、その裁きを満たすのです。それで、血を流すことによって罪を赦すいけにえを、定められたのです。ヘブル書には、「9:22 律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」とあります。子供たちに教えている時に、私はよく話しました。「心の汚いのを、どうやったらきれいになるかな？石鹸で一生懸命、体を洗ったらきれいになるかな？」できない！と答えますね。心の良心を清めるのは、血が身代わりに流されるのを受け入れることによって可能です。

しかし、動物のいけにえ、その流される血は、あくまでも後に来られる方の備えにしか過ぎませんでした。動物の血が流されても、それで罪を思い出さないでいることはできなかったのです。やはり、思い起こされるのです。良心から清められるのは、神の御子ご自身の流される血です。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」

主の流された血は、罪を清める力があります。そして、先ほど話したように、またその血そのものがいのちであります。一つ目の、いのちそのものだという意味と、罪を清める宥めの二つ目を兼ね合わせている言葉が、次です。「ヨハ 6:55-56 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」主の流された血は、罪を清め、そして、いのちを与えます。

したがって、ここの律法を新約時代の私たちに当てはめるならば、血を食べるということは、御子の流された血をないがしろにするということです。「ヘブル 10:29-30 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。私たちは、「復讐はわたしのもの、わたしが報復する。」また、「主は御民をさばかれる」と言われる方を知っています。」

2B 土に注ぎだす血 13-14

¹³ イスラエルの子らや彼らの間に寄留している者のだれでも、食べることができる獣や鳥を狩りで捕らえた人は、その血を注ぎ出し、土でおおう。¹⁴ すべての肉のいのちは、その血がいのちそのものである。それゆえ、わたしはイスラエルの子らに言ったのである。『あなたがたは、いかなる肉の血も食べてはならない。すべての肉のいのちは、その血そのものであるからだ。それを食べる者はだれでも断ち切られる』と。

牛や羊、やぎではない他の獣や鳥を狩りで捕らえます。そうすると、いけにえとして献げるように定められていません。ではどうするのか？それであっても、血を土に注ぎだし、それを土でおおいます。血に対する敬意、いのちに対する敬意を土をおおうことで示しています。このようにして、どんな理由があつたとしても血を食べてはいけないということを示すのです。

ところで、今、新約の時代に生きている私たちは、異邦人である私たちは血を食べても大丈夫なのでしょうか？パウロは、食べるものは、神のみことばと祈りによって聖められると言っていました。ですから、基本、血の入ったものを食べてもよいのですが、しかし愛の配慮が必要です。それは、ユダヤ人たちにとって、それはあり得ないことです。エルサレムの会議において、ヤコブは、異邦人は律法の下に置かれたいと言いました。けれども、ユダヤ人の人たちにつまずきにならないように、キリストのからだとしてユダヤ人と異邦人が一つになる時に、四つのことだけは避けてくださいと言いました。「使 15:19-20 ですから、私の判断では、異邦人の間で神に立ち返る者たちを悩ませてはいけません。ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。」この四つは、異教の儀式の中で行われていますが、これらを避けるためにユダヤ人が自分たちを守ってきました。彼らをつまずかせないように、血も避けるべきと教えています。

3B 死んだ動物 15-16

¹⁵ だれでも、死んだ動物や野獣にかみ裂かれたものを食べるなら、この国に生まれた者であれ寄留者であれ、自分の衣服を洗い、水を浴びなければならない。その人は夕方まで汚れる。それから彼はきよくなる。¹⁶ もし自分の衣服を洗わず、身に水を浴びないなら、その人は自分の咎を負う。」

これまでは、生きている動物を屠った時の話を、主はしておられましたが、死んだ動物やかみ裂かれたものを食べるならば、この時も血は注ぎださないといけないですが、注ぎだしても、違った問題があります。それは儀式的に汚れることです。その時は、衣服を洗って水浴びをして、一日たってから、人々の中に入ることができます。

このようにして、汚れから離れ、そしてキリストの流された血を最も大切なものとみなして生きることが、私たちの務めですね。そして、何よりも教会で礼拝を献げること、そこでキリストの血と肉を受ける聖餐にあずかることが、どれほど大事かが分かります。